

校長室から

第23号

本校の開校はいつなのか？ ～その6～

十三年度に五学級になって増築、別棟に雛形のように小さい白壁の校長住宅も新築。十四年度は大学級となる。

赴任三ヶ月で生まれた長男が、二、三つになる。よちよちと走って来て教室の戸をいきなりあけ、「とうちゃん」とかけよる。生徒は一どにドッと笑う。子供は一時キョトンとしてとまどう。また外で体操をしていると、いつのまにかそばに来て「遊ぼう、とうちゃん」ズボンをはひっぱる。家内はあわててかけて来る。春は遠足に家内は大きな薬かんに冷たい水をもって峠まで迎えに来る。秋はザルにもったトウキビを職員室でハーモニカする。年末には職員が手うちのソバに鶏をつぶしてのびるまで食う。卒業生は山からトド松の枝をおろしてきて部落各戸に門松を付けて廻り五十銭ずついただいてテーブルかけとか儀式用のマン幕、姿見の大鏡などを記念に残す。まことに和気あいあいたる教育的ふんい気であった

こうして教育的ふんい気を作り、校の内外から喜んでもらって満三年、大正十五年に佐藤はるかさん（女先生）末り東洋大学の入学には英語がいらぬことをききそれなら私でも行けるであろう、さっそく手続きを取る。私には英語が全くののが手で、それがために今までに進学望みを絶っていたのである。問い合せて確実に入れそうなのを確かめて、ただちに退職願いを視学に出す。視学は「新年度から高等科併置にきまって居り、君は尋正だが、三カ年継続の本正講習も新年度八月で終れば資格の取れることは確実に見当つけているから、それまでは校長事務取扱としてそのままやってもらおうつもりだった。思いなおさないか。」と言ってくれたが、即座に断る。部落では父兄会長が支庁まで行ってくれたりしたようであるが結局転任ではなく、進学向上のためなら強いてもとめられぬと手引いてくれ、ここに大正十五年四月早々、二男生まれたばかりでまだ寝ている妻を残して第二回目の上京、勉学につとめることになる。車中でヒゲをおとして。これで私の小学校勤務が終る。このとき九月、もう不要であるがやりかけたことであるからとて前年に引続いて検定を受け、本正免許状をうける。（昭和三十九、五、二〇転写）西興部小学校長小川文武

以上、村上久吉（1964年）『西興部時代』豊詐85号「私の小学校勤務（下）」の全文を転載しました。村上氏が赴任した当時の混乱の様子や、学校が信頼を得ていく過程が目に見えます。

『西興部時代』は「校史資料1 本校の歴史 西興部小学校」という綴りに、先述の「学校の歴史を語る座談会」とともにガリ版刷りで転写されたものが綴られていました。この綴りを作成した小川文武氏は、1964（昭和39）年4月1日から1971（昭和46）年3月31日まで7年にわたり、本校の第12代校長として在職していました。小川氏は、旭川市出身の作家三浦綾子の小説「銃口」の主人公「北森竜太」のモデルとなった人物です。「銃口」は、戦時中に教師たちが弾圧された北海道綴方教育連盟事件が背景となっており、三浦綾子の最後の長編小説で、テレビドラマや舞台にもなっています。

すぐに寄り道したくなる筆者ですが、ここは我慢して少しふれるだけにします。「昭和元年、北森竜太は、北海道旭川の小学5年生。父親が病気のため納豆売りをする転校生中原芳子に対する担任坂部先生の温かい言葉に心打たれ、竜太は、教師になることを決意する。竜太の家は祖父の代からの質屋。日中戦争が始まった昭和12年、竜太は望んで炭鉱の町の小学校へ赴任する。生徒をいつくしみ、芳子との幸せな愛をはぐくみながら理想に燃える二人の背後に、無気味な足音…それは過酷な運命の序曲だった。」興味のある方は是非ご一読を。



第12代
小川文武